

33-2 思春期前女児の卵巣腫瘍における術前診断および腹腔鏡手術の注意点

信州大¹, 伊那中央病院²岡 賢二¹, 増澤秀幸¹, 小原久典¹, 加藤 清¹, 伊東和子¹, 小西郁生¹, 窪田文香², 上田典胤²

思春期以前の女児の骨盤内腫瘍は比較的稀であり、診断や治療に苦慮することが多い。今回、9歳女児の卵巣腫瘍2例の腹腔鏡手術の経験から得た教訓を報告する。【症例1】9歳、月経未発来、140cm,45Kg。繰り返す下腹部痛を自覚し、前医を受診し骨盤内腫瘍を認め搬送された。腔、子宮腔部は年齢相応であったが子宮体部は不明瞭で、超音波検査で径6cmの壁の不整に肥厚した嚢胞性腫瘍を認めた。以上の臨床所見からは内腔の拡張した子宮体部か卵巣腫瘍かは判然としなかった。しかし、MRIにて膀胱の後に造影効果を有する扁平な組織が認められ、これが未成熟な子宮体部と判断できたことにより、腫瘍は卵巣腫瘍と診断し、緊急の腹腔鏡手術を行った。左卵巣腫瘍は270度捻転し鬱血著明のため左付属器切除術を施行した。【症例2】9歳、月経未発来、131cm,23Kg。下腹部痛にて来院した。超音波検査にて骨盤内に径5cmの嚢胞性腫瘍を認め、腫瘍マーカーはAFP, CA125, CA19-9, CEA, SCCとも正常範囲であった。MRIにて腫瘍に接して扁平で未成熟な子宮が確認でき、良性卵巣腫瘍の診断にて腹腔鏡手術の適応と考えられた。腫瘍は右卵巣由来で嚢腫摘出術を行った。2例の経験から得たことは、思春期前女児の内性器はきわめて未成熟であり子宮や卵巣の同定が非常に困難であること、しかしMRIでは子宮が非薄扁平で造影される充実性組織として同定可能であること、これにより卵巣腫瘍と推測されかつ良性と予測できれば腹腔鏡手術適応の判断も可能となることである。なお、腹腔鏡手術自体は通常どおりで合併症はなかったが、将来の妊孕性を考慮し未成熟な内性器を損傷させないよう慎重な操作を要すると考えられた。

33-3 若年卵巣機能不全患者における骨密度に関する検討

東海大学

吉武朋子, 石黒葉子, 村野孝代, 和泉俊一郎, 池田仁恵, 呉屋憲一, 鈴木隆弘, 松林秀彦, 牧野恒久

【目的】更年期におけるエストロディオール (E2) 低下と骨量低下との関連がいわれているが、若年無月経患者における卵巣機能低下と骨量に関しては不明な点が多い。若年無月経患者の卵巣機能と骨量の関連を検討した。【方法】当院外来で無月経と診断された若年女性40名(20.95±4.05歳, M±SD)を対象として、無月経期間、E2値、DEXA法で測定した腰椎骨密度、BMIを検討した。【成績】対象40名の無月経期間は54.6±81.3ヶ月であり、初診時のE2値は42±39.25pg/ml、腰椎骨密度(YAM)は66.9±30.52%と低い傾向にあった。しかし初診時のE2値と腰椎骨密度、および無月経期間と腰椎骨密度との間に相関関係はみられなかった。対象40名の中で続発性無月経32名について検討したところ、第一度無月経(I度AM群)6名、第二度無月経(II度AM群)26名であった。E2値はI度AM群で66.6±48.49pg/ml、II度AM群で40.96±22.66pg/mlでありII度AM群の方がより低い値であった。腰椎骨密度はそれぞれ61.16±30.83%、67.84±31.6%であり有意差はみられなかった。また、BMI≤18群と、BMI>18群とに分類し腰椎骨密度を比較したところ、BMI≤18群では60.81±31.9%、BMI>18群では79.53±10.42と有意差はみられなかったものの、BMI≤18群ではより低い傾向にあった。【結論】若年無月経患者においては腰椎骨密度を測定する必要があることが示唆された。腰椎骨密度は、全身的なE2の枯渇状態を反映する指標となりうると考えられた。

33-4 多嚢胞性卵巣症候群症例における子宮動脈血管抵抗の検討

岡山大学産科婦人科

佐々木愛子, 中塚幹也, シェキルシェビブ, 野口聡一, 鎌田泰彦, 平松祐司

【目的】多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)の主症状は排卵障害であるが、子宮内膜異常や心血管イベントとの関連も知られている。今回、PCOS症例の子宮内膜像、子宮動脈血管抵抗を評価し、各種ホルモン値、糖、脂質代謝との関連を検討した。【方法】(1)希発月経、(2) LH基礎値高値、(3)超音波検査で多嚢胞像の3条件で診断したPCOS25症例、正常婦人45症例を同意のもと対象とし、子宮動脈の血管抵抗(Pulsatility Index:PI)値を測定した。また、空腹時に各種ホルモン、糖、脂質等の検査を行った。【成績】PCOS症例は、正常婦人に比較しBMIは有意に高値であったが、血圧には差が見られなかった。Testosterone, Insulin, HOMA-Rは有意に高値であり、HDL-Cholesterolは有意に低値であった。超音波検査上、卵胞期の子宮内膜の厚さには有意差はなかったが、高輝度領域の比率は有意に高く、子宮動脈PI値は、正常婦人の2.33±0.43(mean±S.D.)に比較して、PCOS症例で3.40±1.03と有意に高値であった。黄体期の子宮動脈PI値は、正常婦人の2.17±0.37に比較して、自然排卵の起こったPCOS症例で2.93±0.49と有意に高値であった。また、卵胞期の子宮動脈PI値と、BMI(R=0.33)、LH/FSH比(R=0.50)との間に有意な正の相関が、HDL-Cholesterol値(R=-0.36)との間に有意な負の相関が見られた。【結論】PCOS症例の子宮動脈血流は不良であり、排卵障害以外にも妊孕性に影響している可能性がある。また、若年でも血管内皮障害が始まっている可能性がある。